

## 第 12 冊

### 『戦国茶の湯倶楽部』 ～利休からたどる茶の湯の人々～ 中村修也、大修館書店、2013年 (上)

村の田んぼにタケノコ千本

表題を見て、「これ、何やねん？」って思いましたか？もし、あなたが受験生なら、すぐに「ピン！」ときたと思うのですが、どうでしょう？！

そう、千利休が大成したのが「侘び茶」「茶の湯」と言われますが、千利休の先達が村田珠光であり、武野紹鷗です。その三人を一挙に覚えてしまおうというのが、上の「**村の田んぼにタケノコ千本**」です。茶の湯の「ビッグ3」を順番に覚えられるすぐれものですね。何十回と呪文のように唱えていたら、自然に覚えてしまうと思います。

そこで、今回取り上げるのが、**中村修也氏**の『戦国茶の湯倶楽部～利休からたどる茶の湯の人々～』（大修館書店）です。日本の伝統文化と言えば、いろいろありますね。例えば、「能」「華道」「香道」「浄瑠璃」「歌舞伎」などなど。その中でも、「茶道」は室町時代から安土桃山時代にかけて、「大成」していきました。その中で、大きな役割を果たしたのが**村田珠光**、**武野紹鷗**、**千利休**の三人です。

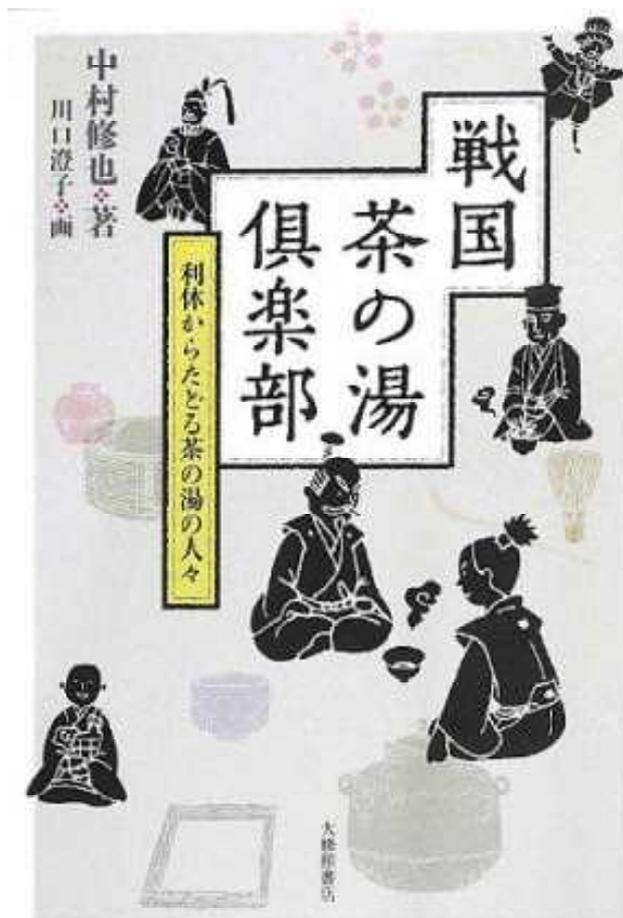
さらに、三人の周囲には多くの「茶人」がいました。また、大名の中にも茶の湯に親しんだ**織田信長**や**豊臣秀吉**がいます。

これらの人物と茶の湯との関わりを中村修也氏の『戦国茶の湯倶楽部』を中心にみていきましょう。

まずは、著者の簡単な紹介から。中村修也（なかむら しゅうや）氏は、筑波大学第一学群人文学類卒業、1989年同大学院歴史・人類学研究科博士課程単位取得修了。京都市歴史資料館での勤務を経て、

1994年文教大学教育学部助教授、教授を歴任されました。2001年「日本古代商業史の研究」で筑波大学文学博士になりました。日本古代史、茶道史を専門とし、「歴史王カード」を作成するなど、歴史教育の普及も行っておられる日本史学者、文教大学教授です。なお、下記に主な著書を列挙しておきます。

- 『秦氏とカモ氏 平安京以前の京都』（臨川書店 臨川選書 1994）
- 『平安京の暮らしと行政』（山川出版社 日本史リブレット 2001）
- 『今昔物語集の人々 平安京篇』（思文閣出版 2004）
- 『女帝推古と聖徳太子』（光文社新書 2004）
- 『日本古代商業史の研究』（思文閣史学叢書 2005）
- 『偽りの大化改新』（講談社現代新書 2006）
- 『謎解き古代飛鳥の真相』（学研M文庫 2008）
- 『白村江の真実新羅王・金春秋の策略』（吉川弘文館 歴史文化ライブラリー 2010）
- 『日本神話を語ろう イザナキ・イザナミの物語』（吉川弘文館 歴史文化ライブラリー 2011）
- 『天智朝と東アジア—唐の支配から律令国家へ』（NHKブックス 2015）
- 『利休切腹』（洋泉社 2015）



## 茶道は女性のもの？！

突然ですが、質問です。今年度（2019）の洛北高校茶道部に所属している男子生徒は、何人でしょうか？

茶道と言えば、「女性のもの」「女性がやるもの」というイメージがないですか？私の周辺で茶道をしている人もやはり女性ばかりですし、「上品な習い事」といったイメージがあります。でも、それは現代の茶道であり、茶道が生まれた頃、さらに茶道が発展した頃には、「女性のもの」ではなく、むしろ「男性のもの」でした。

茶道が「女性の習い事」となるのは、明治以降のことで、武家の庇護を失ってしまったさまざまな流派の家元が茶道の復興・再興をはかるために、女性の教養・習い事として普及させていったからです。

先ほどの問いの答えは、「ゼロ」「いない」です。

もともと、日本にお茶が入ってきたのは、平安時代の初頭。平安京の大内裏に茶園が造られ、朝廷の仏教儀礼などに使用されていたといえます。

しかし、お茶を飲むという習慣が一般化するのには、鎌倉時代で、臨済宗の開祖栄西が中国から持ち帰ってからです。栄西は茶の飲み方や薬効、茶の栽培、製茶などについて『喫茶養生記』を著し、鎌倉時代末期には僧侶や貴族ばかりでなく、民衆へも普及していきます。

当初は臨済宗の寺院を中心に「薬」として飲まれていましたが、徐々に広がっていきました。ちなみに、このときは抹茶に湯を注ぎ込んで飲む「点茶法」だったといえます。

ところで、ここで質問です。

栄西の『喫茶養生記』はある人物に献上されましたが、その人物は誰でしょうか？

覚えていますか？これは、簡単ですよ。

答えは、鎌倉幕府第3代将軍源実朝でした。



栄西開山の建仁寺の境内にある「茶碑」

さて、栄西がもたらしたお茶ですが、これを普及させた人物は、**明恵（みょうえ）上人**です。京都の西に柁尾（とがのお）という場所があります。明恵上人はここに茶の樹を育て、それが宇治へ広がり、室町時代の末期には柁尾茶や宇治茶というブランドが生まれていきました。

### ちなみに、明恵上人って、どんな人物でしたか？

明恵は、鎌倉時代前期の華嚴宗の僧侶で、法諱は**高弁（こうべん）**です。明恵上人・柁尾上人とも呼ばれます。紀伊の国の出身で、**華嚴宗中興の祖**と称される名僧です。

明恵は、1206年、後鳥羽上皇から柁尾の地を下賜されて高山寺を開山し、華嚴教学の研究などの学問や坐禅修行などの観行にはげみ、戒律を重んじて顕密諸宗の復興に尽力しました。

**明恵上人といえは、ある人物を、ある書物によって批判しましたが、批判した人物、並びにその著を教えてください。**

**浄土宗の開祖「法然」を批判した書は『摧邪輪（さいじゃりん）』でしたね。**

なお、高山寺と言えは、**「日本最古之茶園」**の石碑（次の写真）があります。また、「日本最古の漫画」といわれる**『鳥獣戯画』**を所蔵している（現在は京都国立博物館と東京国立博物館が保管）ことで有名ですよね。



さて、お茶は僧侶から武士、庶民へと広がっていきます。この普及の原動力となったのが、「**闘茶**」です。これは、お茶をまず飲んでみて、そのお茶の産地を当てるといったゲームのようなものから始まりました。

このあたりのことは、『**ニャンと室町時代に行ってみた**』（もぐら、KKベストセラーズ、2017年）から紹介しましょう。

室町時代の初頭、最も盛んだったのは「四種十服」（4種類のお茶のうち3種類は3服ずつ、1種類は1服して飲んだお茶の種類を当てる）だったそうです。この闘茶は賭け物を競い合う賭博行為として行われることが多かったので、禁止令が出ますが、あまり効果はなかったそうです。

婆娑羅（ばさら）大名として有名な**佐々木道誉（どうよ）**の屋敷ではしばしば闘茶が行われ、座敷には賭け物が山のように積み上がったと伝えられます。闘茶の後は酒宴が設けられ、猿楽や遊女の踊りに興じたといえます。

唐物趣味の流行もあって、**このころの茶席はテーブルを囲み椅子に座る異国風のスタイル**で、椅子にはトラやヒョウの皮が好まれたといえます。現在の茶道とは雰囲気は全く違いますよね。

足利義政のころに、書院に唐物の茶道具を飾って静かにお茶を飲むスタイルの「**書院茶**」が流行します。一方では、簡素な茶を楽しむ庶民の「地下（じげ）茶の湯」も生まれ、これらが融合して深い精神性を重んじた「**侘び茶**」が発展しました。侘び茶は数寄屋と呼ばれる四畳半ほどの茶室で行い、これが

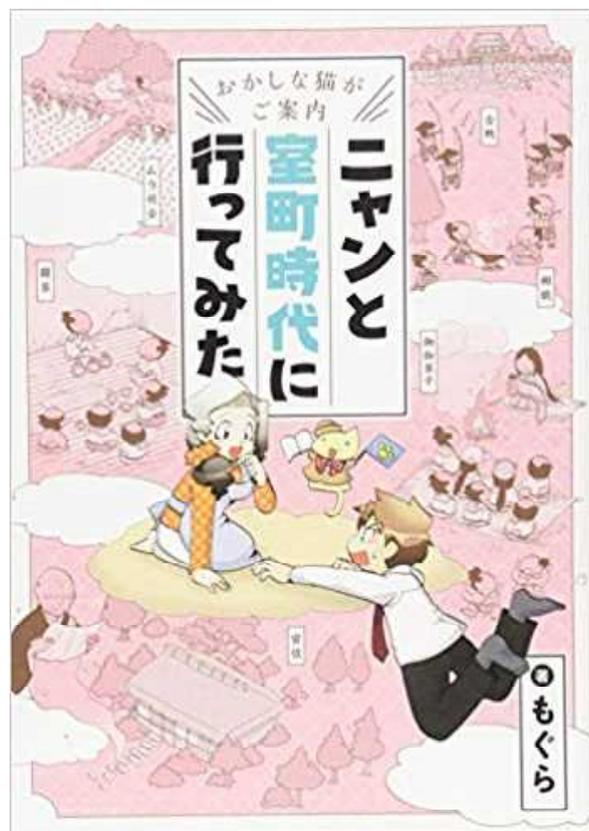
現在の茶の湯の基礎となりました。

村田珠光が創始し、武野紹鷗、そして千利休により完成された「侘び茶」は、禅林風の簡素な茶料理としての会席料理を生むなど、日本の食文化にも画期的な変化をもたらしました。

茶の湯は、やがて武家のあいだでも流行し、織田信長、豊臣秀吉など大名によって政治的に利用されるようになっていきました。

もぐらさんは『ニャンと室町時代に行ってみた』のなかで、次のようにまとめています。

このように、朝廷の仏事から「茶湯御政道」まで、お茶は一貫して男性文化の中で発展してきました。歴史上、有名な女性茶人が現れなかったことにもそれが示されています。



## 「侘び茶の祖？」＝村田珠光

それでは、いわゆる「侘び茶の祖」として喧伝されている人物、村田珠光から始めましょう。

千利休は茶会で「珠光茶碗」を使っていたと言われます。奈良に生まれ、京都で没した浄土宗の僧侶で、連歌師の宗祇や禅僧の一休宗純と付き合い、茶の湯をよくし、のちに珠光茶碗とか珠光青磁と呼ばれるようになる中国の雑器を茶碗に用いた、などのほかはよくわからない人物です。



珠光青磁茶碗（出光美術館所蔵）



珠光茶碗（根津美術館所蔵）

まず、[山川出版社の『詳説日本史』](#)で、村田珠光のことについて、どのように書かれているのか確認しましょう。

[茶の湯では、村田珠光が出て、茶と禅の精神の統一を主張し、茶室で心の静けさを求める侘び茶を創出した。](#)

と書かれてあります。さらに、脚注には

[侘び茶の方式は、村田珠光ののち堺の武野紹鷗を経て千利休によって完成された。](#)

と補足がしてあります。

この書き方では、村田珠光は実在の人物だと、判断できますよね。

ところが、です。中村修也氏の『戦国茶の湯倶楽部～利休からたどる茶の湯の人々～』では、村田珠光について「えっ」と驚くようなことが書いてあるのです。

実は、珠光が茶の湯を行ったという史料は1つもないのです。……。室町時代後期のものとして、珠光作の水墨画なども数点伝来しています。しかし、それらは「伝珠光」であって、真筆であるかどうかもわかりませんし、署名の「珠光」が茶の湯の珠光その人であるかどうかもわからないのです。

えっ、ちょっと待ってください。珠光が茶の湯を行ったという史料が1つもない?! どういうことですか?!

中村修也氏は続けます。

一番確かなのは、古記録や古文書に珠光が茶人として登場することですが、残念なことにそれがないのです。そのため、珠光非実在説までとびだしました。珠光というのは『山上宗二(やまのうえそうじ)記』がつくりあげた幻影としての茶祖ではないのか、という考え方です。『山上宗二記』以外に珠光を語る同時代的史料が皆無では、このような疑いを抱かれてもしかたありません。

しかし、珠光の存在だけであれば、それを証明する史料はあります。

それは、大徳寺真珠庵の「一休年忌奉加帳」です。……。この真珠庵の史料によって、珠光が一休和尚に参禅していたことも認められます。しかし、こうしたことは、あくまで間接的な推測史料でしかありません。少なくとも、珠光を侘び茶の祖と呼ぶならば、茶会史料の1つもなくてはなりません。それが明示されない以上は、珠光を茶人として扱うことは歴史学的には無理というしかありません。

珠光の存在は別にして、珠光の弟子として『山上宗二記』には京都・奈良・堺の人々が登場してきます。これほど多くの弟子がいたのだから、珠光の存在も疑う余地がないように思えます。ところが、珠光は南都称名寺の僧侶であると伝わっているのですが、『山上宗二記』では「皇明寺」と間違えて記述するなど、信憑性に欠ける箇所が少なくないそうです。

※山上宗二は、千利休の高弟で、20年間も茶の湯を学びました。利休に同行して茶会に出席している様子などをまとめたのが『山上宗二記』です。

さらに、中村修也氏は次のように書いています。

珠光は侘び茶の祖とされています。ところが、珠光の愛用した道具を『山上宗二記』から拾い上げると、松花の大壺、珠光青磁、趙昌や徐熙の筆による花鳥画……。というように、すべて唐物です。……。

これだけの唐物道具を所持していながら、茶の湯を行った史料が一切ないと言うことの不自然さ。珠光という名前の人物はある。珠光ゆかりの道具も存在する。しかし、珠光が茶の湯を行った記録が存在しない。

このミッシングリングをどのようにすれば埋めることができるでしょうか。

うーん、**村田珠光を「侘び茶の祖」と言い切ることはできない?**、ということなんですね。間接的な史料はあっても、直接的な史料が存在しないというのが事実なら、確かに断定はできませんよね。

## 利休の師匠＝武野紹鷗

では、村田珠光と千利休を「結ぶ」武野紹鷗は、どんな人物だったのでしょうか？

中村修也氏の『戦国茶の湯倶楽部～利休からたどる茶の湯の人々～』のなかで、武野紹鷗はどのように記述されているのでしょうか。

武野紹鷗は文亀2年（1502）生まれ、弘治5年（1555）没。堺の豪商であり、「侘び茶」の中興とされる茶人でもあります。一般的には利休の茶の湯の師ということになっています。54年の生涯のうち、20代後半から30代の半ばまでの約10年余の間、京都に通っていました。三条西実隆（さんじょうにしさねたか）の日記『実隆公記』・・・の記事に紹鷗が登場することで、ある程度そのことが確認できます。・・・・

そして、紹鷗は三条西実隆から「**詠歌（えいが）大概**」を伝授されています。

ちなみに、「詠歌大概」とは、藤原定家の歌論書のことです。13世紀初頭に成立し、漢文体による簡明な歌論（仮名本では仮名文）と、勅撰八代集より抄出した103首の秀歌よりなる「秀歌体大略」の二部で構成されているそうです。

以前、『日本史の部屋』で『逃げる公家・媚びる公家』を取り上げました。室町時代、特に戦国時代の前後から全国の荘園からの年貢が届かなくなり、京都の公家も生活が苦しくなります。そこで、公家は自分の専門の知識や技術を切り売りして（アルバイトをして）生活費を稼ぐようになったことを紹介しました。

**三条西実隆**も書道が得意だったので、和歌や伊勢物語などの書写をして、金を稼いでいました。また、和歌の講義などもしていました。

ここで、質問です。

質問1. 三条西実隆はある人物から「古今伝授」されました。それは誰からでしょうか？

質問2. 三条西実隆に「古今伝授」した人物は、誰から「古今伝授」されたのでしょうか？

質問3. 「古今伝授」とは、そもそも何なのでしょう？

答え1. (飯尾) 宗祇から伝授されました。

答え2. 宗祇は東常縁(とうのつねより)から伝授されましたね。

答え3. 勅撰和歌集である「古今和歌集」の解釈を、秘伝として師から弟子に伝えたものです。狭義では、東常縁から宗祇に伝えられ、以降相伝されたものを指します。

1542年、武野紹鷗は3人の人物を招き、茶会を開いています。このことは茶会に招かれた松屋久政の茶会記である『松屋会記(まつやかいき)』に記録があります。この茶会において、武野紹鷗は自分の持つ名物(「波の絵」=元の画家の絵画と「松島の壺」=唐物茶壺)を惜しげもなく見せてくれた、とあります。

このことで、中村修也氏は次のように書いています。

現代は、美術館や博物館で、茶の湯の展覧会などがあります。そのおかげで国宝や重要文化財の茶道具にもお目にかかれます。……。戦国時代には美術館も博物館もありません。茶道具の名品は、その茶道具を持っている人のお茶会に招待されなければ、決して見ることはできなかったのです。しかも、たとえ所有者のお茶会に招待されたとしても、必ずしも自分が見たいと思っていた道具が出てくるとは限りません。……

そのことに気づくと、この時の紹鷗の茶会に呼ばれた……気持ちが理解できるのではないのでしょうか。そして、茶会の亭主の方も、自分の道具の良さがわかる人にしか見せる気になりません。……。つまり、よい道具を拝見したければ、客の方にも道具を見る教養や経験が要求されるということです。入館料を出せば見ることができるというものではなかったのです。それゆえ、名物道具を見たことがあるということ自体が、茶人の格を示すことにもなったわけです。

うーん、このことは考えさせられます。私は、月に1回は美術館・博物館に出かけて、気軽に国宝や重要文化財などを見ている。でも、昔は見るチャンスはほとんどなかったのです。当たり前のことですが、そのことに改めて気づかされました。現代に生きる我々は、お金さえ出せば見ることができるのですから、どれだけ幸せなのでしょう。

いずれにしろ、村田珠光は茶会を開いた史料がないので、「侘び茶の祖」としての存在を断定できないのですが、一方、武野紹鷗は当時のお公家さんの日記や茶会に招かれた人の茶会記に紹鷗のことが確実に史料として残されているので、その存在は間違いがないと言えることがわかりました。

しかも、「侘び茶」と言いながら、結構高そうな「名物」を持っていて、茶会のたびにそれらをお客に見せていたというのです。なんか「侘び茶」というイメージと違うような気がします。

ところで、『利休入門』(新潮社、2010)の著者である木村宗慎氏によると、

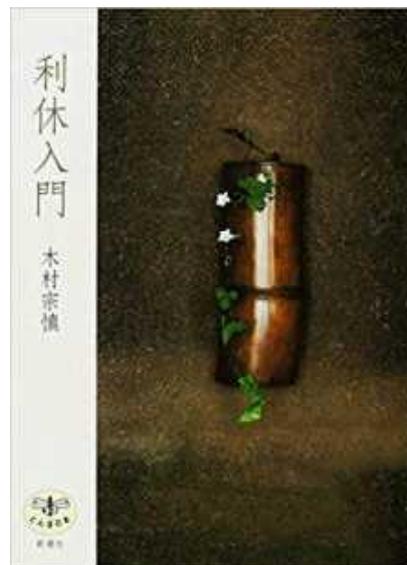
「侘び茶」の「侘び」は文字通り「侘しい」「貧しい」という意味でした。唐物の名物を持たず、茶

室も狭い三畳敷き、そうした「侘しい茶の湯」のあり方を、「冷え枯るる」とか「枯れかじけて寒がれ」といった連歌の美意識で評価しようとしたのが、紹鷗とその周辺の茶人たちでした。ただし、彼ら自身の茶の湯は、侘しいどころか名物ばかりだったので、一種の倒錯というか、「ごっこ」というか、金持ちがB級グルメをよろこぶようなものだったのかもしれない。

うーん、名物道具を用いる武野紹鷗の茶の湯は、「侘び茶」とは言えず、利休もまた、60才頃までは唐物の天目茶碗を多用するなど、「侘び茶」の茶人ではありませんでした。紹鷗の茶風は「侘び」茶ではなく、「雅び」な茶だった、ということなんですね。

さて、紹鷗の茶の湯は、その後、千利休、津田宗及、今井宗久らに影響を与え、彼らによって継承されていきました。特に、利休は「術は紹鷗、道は珠光より」と説いていて、これによって紹鷗の名声が広く知られることとなったそうです。

## 茶道大成者＝千利休



千利休といえば、**侘び茶（草庵の茶）の大成者**として知られ、「**茶聖**」とも言われます。また、**今井宗久、津田宗及**とともに「茶湯の天下三宗匠」と称せられ、多くの弟子を抱えました。

茶人としての利休の人生には、2つの大きな転機がありました。

1つは、天正2年（1574）53才の頃、織田信長の茶頭になったことです。

もう1つは、天正10年（1582）、豊臣秀吉の茶頭になったことです。

茶頭の役は、数人がつとめ、常勤の仕事ではありませんでした。主君が茶会を開く時に、準備や進行

などを取り仕切る役目をつとめるわけです。

天下人・豊臣秀吉の側近という一面もあり、秀吉が旧主・織田信長から継承した「御茶湯御政道」のなかで多くの大名にも影響力をもちました。しかし、やがて秀吉との関係に不和が生じ、最後は切腹へと追い込まれたことは有名ですね。大永2年（1522年）に生まれ、天正19年（1591年）2月28日に70才で亡くなりました。

さて、千利休っていう名前ですが、もちろん本名ではないですね。利休の本名は何でしょうか？

利休の本名は、「田中与四郎」です。なんか、あまりにふつうの名前ですね。天文14年の24歳の時に、南宗寺の大林宗套（だいらんそうとう）和尚から「宗易」号を授けられます。「宗易」とは何かというと、「法号」です。

法号というのは、出家した時に僧侶に付けてもらう名前のことです。仏教徒になったという証として授けられたものです。堺の商人は、堺の南宗寺の和尚に法号を付けてもらっているそうです。今井宗久や津田宗及というのも法号なんですね。そして、法号に「宗」の字がつくのは、中村修也氏によれば、たいてい大徳寺系の法号と考えて間違いなさそうです。

では、千宗易だった人物が、いつ、どのような理由で「千利休」になったのでしょうか？

「いつ」、というのははっきりしています。天正13年（1585）10月7日、67歳の時です。

では、なぜ、千宗易は「利休」となったのでしょうか？

それは、禁中でお茶を点てるためです。宗易も法号ですが、特に、内裏に入るために、正親町天皇から「利休」号を授かったのです。出家の身となり、世俗の身分を超越した存在にならないと、一介の商人では内裏に入ることは許されなかったのです。要は、宗易の箔付けをしたということなんですね。

では、「利休」というのは、何なのでしょう？ これは「居士」号で、より修行を積んだ者に与えられる尊称です。

意味には、諸説あります。後年、利休の息子道安（どうあん）に問われた大徳寺の僧侶春屋宗園（しゅんおくそうえん）は「考古錐（ろうこすい）」とこたえているそうです。

考古錐とは、「古びて役に立たない錐（きり）」のことで、「利休」とは「鋭利さが休する」ということなのでしょう。

その号を誰が授けたのか、ということについても諸説あるそうです。天正13年（1585）、大徳寺の古溪宗陳（こけいそうちん）から、という説が有力だそうです。

昔の人は、現在と違って、何度も名前が変わりました。同じように、号も1つではありませんでした。もっと言えば、「田中」与四郎なのに、「千」利休となっていますが、「千」も苗字ではなく、「屋号」と考える方が自然です。例えば、歌舞伎の世界には「萬屋」という屋号が今でもありますよね。



千利休



妙喜庵待庵の茶室

さて、「茶聖」千利休って、どんな人だったのでしょうか？

「千利休由緒書」という書物があります。それによると、千家の祖は、田中千阿弥（せんあみ）という人物であったと書かれているそうです。千阿弥は室町幕府第8代将軍足利義政の**同朋衆**でしたが、**応仁・文明の乱**を避けて、京都から堺に引っ越したそうです。

ところで、**同朋衆**って何でしょう？

教科書でも足利義政の東山文化で登場しますよね。同朋衆というのは、**将軍の身の回りの世話をする坊主頭の人々**のことです。彼らの身分はよくわかっていません。僧侶でもないし、武士でもない。でも、同朋衆を描いたものを見ると、彼らは刀を差しています。

木村宗慎氏の『利休入門』（新潮社、2010）によると、

千阿弥の出身は上野国（群馬県）ということになっています。……。

ここは、もとは上野国新田荘と呼ばれたところです。そして興味深いことに、この新田荘内には世良田郷が存在します。……。世良田荘には、徳川氏の祖とされる世良田義季（よしすえ）が創建した長楽寺があり、隣接して世良田東照宮があります。長楽寺は天海（てんかい）僧正によって保護され、歴代徳川将軍の帰依を得たお寺です。

つまり、利休の先祖と家康の先祖は、隣村の住人であったということになります。……

えーっ、徳川家康のご先祖様と千利休のご先祖様が、ほぼ同じ場所で生活していたんですか！すごい、偶然ですよ。でも、ほんとうかな？って気がします。さて、続きを見てみましょう。

京都から堺へ引っ越した千阿弥一家のその後ですが、どうやら千阿弥は悠々自適の隠居を決め込み、息子の与兵衛が商売を始めたようです。・・・ところが、慣れない商売で無理をしたようで、与兵衛は早くに亡くなってしまいます。

利休19歳の天文9年（1540）12月8日のことでした。利休は2代目・・・一家を背負った利休には、まずは商売が第一で、茶の湯を楽しんでいる余裕はなかったと思われます。

とはいえ、茶の湯は商売人同士の寄り合いでも行われました。好むと好まざるとに関わらず、若き利休も茶の湯に親しんでいったことでしょう。

19歳といえば、今ならば高校卒業したての年頃ですよ。そんな年齢で家業を引き継ぐことになりました。家業というのは、干し魚問屋、さらに納屋（倉庫）貸し業でした。

そこから商売を始めて、なんと天下人織田信長や豊臣秀吉の茶頭になっていったのですから、そうとうなやり手だったのでしょうね。利休の絵を見てると、「頭が切れる」男という感じがしてきます。

利休は秀吉の信頼を得て、茶の湯だけではなく、政治の世界にまで進出していきます。しかし、絶頂期から転げ落ちることになってしまいます。その理由や背景については、少しだけ触れましょうか。

天正16年（1588）には師の古溪宗陳が秀吉の怒りを買って、京の都を追放されました。天正17年（1589）には大徳寺の聚光院を妻と自分の墓所と決めます。同じ年の12月、利休の寄進によって2階部分を増築した大徳寺山門が竣工、山門の上には利休の等身大の木造が設置されます。

天正18年（1590）には、愛弟子の山上宗二も秀吉の怒りを買って、耳鼻をそがれて殺されてしまいました。そして、翌年の1月、大徳寺山門の利休像が秀吉に対して不敬であるとされ、2月には利休像が聚楽第の門前で磔にされてしまいます。

そして、その翌日、堺で蟄居していた利休は京に呼び戻され、聚楽屋敷で切腹しました。70才のことでした。

現在、茶道といえば「表千家」とか「裏千家」という名前が出てきますよね。これって千利休とどういう関係なんですか？

前回、千利休について紹介した史料「千利休由緒書」ですが、これは千宗左（そうさ）という人が紀州徳川家に提出したものです。

千宗左って誰でしょうか？ 彼の号は江岑（こうしん）といい、千の宗旦（そうたん）の三男で、表千家の初代にあたる人です。

利休が宗恩（そうおん）と再婚した時に、連れ子の少庵（しょうあん）も養子とします。その**少庵の息子が宗旦**で、宗旦の3人の息子が、それぞれ**表千家、裏千家、武者小路千家**の祖となるのです。

宗旦は、自分が苦労したために、息子3人をなんとか大名家に就職させようと努力します。その努力が実って、表千家の宗左は紀州徳川家に、裏千家の宗室（そうしつ）は加賀前田家に、武者小路千家の宗守（そうしゅ）は高松松平家に就職できたといえます。ただし、就職できたといっても、常勤ではなく、お殿様が茶会を開く時に、その茶会の準備をしたり、茶頭をつとめたりしたのですよ。

最後に、**木村宗慎氏の『利休入門』（新潮社、2010）**を読んでいて、「発見」したことがありましたので紹介します。

利休の作った茶室として現存するのが京都山崎にある「**妙喜庵待庵**」ですよ。そして、茶室に入る際、「にじり口」と呼ばれる小さな引き戸を開け、身をかかめて入ります。このにじり口を考案したのが利休でした。

**入り口が狭いと、武将も刀を置かざるを得ず、さらに頭をさげて入ることで、茶室内では身分や立場の上下がなくなる、なんてことはありません。にじり口がなかった頃の茶室の入り口は、障子戸でした。茶室は離れではなく、待庵や不審庵のように、母屋にくっつけて建てられるものなので、母屋から廊下伝いにゆくか、あるいはいったん庭へ降りたとしても、また茶室の縁に上がって入るものでした。その廊下や縁側をやめ、障子戸からの出入りをやめてしまったのが利休なんです。**

**どうして、利休は障子戸の入り口をやめたのでしょうか？**木村氏は次のように推測します。

**私は、光、明かりのためだと思います。調光です。障子戸はその前面が明るいので、平板な光しか入りません。それをやめて、まず茶室の四方を壁で囲い、そこに窓をあける。窓ならば、その位置や大きさによって光を調節できます。かりに茶室を舞台と考えれば、窓が照明だったのです。茶室に窓をあけたのも、利休が最初といわれています。にじり口は、その結果に過ぎません。**

亭主を照らす「窓」こそ、利休の最高のアイデアだったのではないのでしょうか。利休が亭主だったら、窓から入ってくる光が利休を浮かび上がらせるのですから、これはまさにスポットライトですよ。